

最近「名古屋文化」に関わる出版、放送、新聞記事が多く見受けられますが、間違いや誤解も多い。ここでは、私なりの正しい「名古屋文化論」をお話しいたします。

地域文化の特徴を的確に、しかもわかりやすく表しているのは方言です。名古屋は名古屋弁。しかし最近のテレビや新聞紙上の名古屋弁は、目を覆いたくなるような下品な名古屋弁しか聞きませんし、見ません。早い話、名古屋弁らしき言葉にするには、話の末尾に「なも」か「えも」をつければよいのです。例えば「ええかやあも」とか「お丈夫だなも」などなど。

名古屋弁には上町言葉（^{うわまち}上の言葉）と下（^{しも}）の言葉と武家言葉（^{かみ}）があります。上とは中区の広小路通より北の碁盤割りの町。しもは広小路通の南側、大須、橘町あたり。熱田（宮の宿）は別の地域。ただし言葉は名古屋弁の一つ熱田弁（宮弁）。その特色を記すと、

①名古屋弁には「さま」がつく

おじさま おばさま にいさま ねえさま おっさま（和尚さま） 文ちゃま

②名古屋弁には古語が生きている

お(措)いてちょうだやあ 気がずつ(術)なやあ
米をか(浸・漸)してちょうやあ 食べあぐ(倦)む

③名古屋弁には京言葉が入っている

ようけ(余慶?) ぎょうさん(仰山))

④あそばせ言葉と武家言葉

ごまやあすばせ いらやあすばせ
ご無礼します(いたしまする) 安田でござりまする

などとなります。これらの特徴から、名古屋弁はまるやかで、暖かみがあり、しかもあいてに対して丁寧であり、江戸時代からの共通語や京言葉が今も使われていることがわかります。したがって、江戸時代から変わっていない、タイムカプセルのような土地柄であるという面もっています。

次に名古屋根生い（^{ねお}）の名古屋人氣質ですが、これについても、

①名古屋人は恥ずかしがり屋（照れ屋）

②名古屋人は元来節約好き（原則借金はしない）

③名古屋人は祭事・慶事・仏事には出し惜しみしない

④名古屋人は地縁血縁をととても大事にする

という点が挙げられます。よく名古屋人は排他的だなどといわれますが、これなんぞは全く謂われのない誤解です。他所から来た人を暖かく迎え入れ、その人の才能を見いだして伸ばすべく様々な援助をしている例は多くあります。

こういった特色は、名古屋の土地柄に起因しています。もともと日本全国、北から南まで、山有り谷有り川有り海ありで、世界に類を見ない複雑な地形があり、しかも四季に富んでおり、それぞれの土地柄に根ざした地域文化は世界に類を見ない多岐にわたったものがあります。その中の名古屋の土地柄ですが、名古屋（尾張）は日本の真ん中に位置し、木曾の山、木曾川・長良川・揖斐川の所謂木曾三川、その綺麗な川が流れ込む伊勢湾、その伊勢湾に隣り合った濃尾平野があり、じつに豊かな、生産性の高いところです。したがって、他地域と比べて余裕があり、種々の文化も育ちやすいところでした。その豊かさに注目したのは徳川家康です。来年は名古屋城築城開始 400 年に当たります。因みに、この土地柄を見立てとして作られたのが今の徳川園です。

徳川家康の城下町作りは、名古屋台地の一番北に城を作り、その南に碁盤割りの町を作り、城の大手門から南へまっすぐ伸びる道本町通りを熱田まで作りました。これは、奈良の都・京の都と同じ作りです。城の大手門から伸びる道は、ほとんどが途中で直角に折れるように作り、敵の侵入を防ぐ役

割をもたせていましたが、無駄も多く、家康は種々の活動が行いやすいようにしたのでしょう。家康は最初、三男の秀忠を二代将軍に、四男の忠吉を初代尾張藩主にいたしました。ここから、秀忠には江戸で政治を、忠吉には名古屋で経済を司らせようとしたものと思われます。ただ、忠吉は清須城の時に亡くなってしまうので、名古屋城の初代尾張藩主には九男の松平義直（後の徳川義直）が就きました。義直は謹厳実直な性格で知られ、名古屋の基盤整備（入鹿池・木津用水など）に務めました。一方で、芸能に対しても非凡な才能を持っていました。一つには、能の鼓の名手として大坂城の豊臣秀頼から、「荊田の小鼓」を拝領（今も徳川美術館に所蔵されて、時々展示・演奏されています）したこと、二つには、寛永12年（1635）7月22日の三代将軍家光の江戸城での茶宴に義直が中心となって若衆踊りを披露したことです。二代藩主光友は能の立ち方の名手であり、また箏の上手でもありました。この時は側近だけで、尾張藩への賓客の求めに応じて、能の上演が出来たということです。さらに城下の南端に新しい町橋町を作り、その中に豪華な芝居小屋（歌舞伎劇場「橋町裏大芝居」）を建て、管理は町に任せました。その上、城下で評判の饅頭屋に店の大看板を書いて与えたのには驚かされます。

こういう一連の藩主の文化活動の花が育っていき、見事に開花したのが七代宗春の時だったのです。宗春は藩主となるとすぐに『温知政要』なる政策理念の本を書き、印刷出版して家臣に与えました。いまでいう政策マニフェストといったところでしょう。こんなことをした殿様は日本史上宗春ただ一人です。その目的の中心は「規制緩和による活性化」です。これによって、尾張名古屋は日本一いきいきのびのびとした町になりました。元文4年（1739）正月に宗春は失脚しますが、宗春の蒔いた種はそれから5年後あたりから、町のあちこちから芽を出し、着実に文化の花が育っていきました。宗春までは殿様主導型の文化でしたが、その後は町人そして庶民が活躍する文化も盛んとなりました。

例えば茶道。尾張藩の茶道は、織田信長の弟織田有楽齋の始めた有楽流。尾張藩に客が来ると先ずは抹茶でもてなし、用が済むと能でもてなしました。徳川美術館の展示室の順が、第2室に猿面茶屋、第4室に能舞台となっているのはこれを表しています。江戸時代も中期の六代継友の頃になると町人の茶道が盛んになり、伊藤次郎左衛門や高田太郎庵らが京にいき、千家流の茶道を習って帰ったり、千家流の宗匠が教えにやってきました。その頃一番遅れてやってきたのが松尾宗二で、名古屋で松尾流を始め、現在愛知県では最大の流派となっています。その後文政年間（1818～1830）になると、茶道が余りにも盛んになり、尾張藩は所謂「抹茶禁止令」をだしますが、効果は無く、ますます盛んになっていき、ついには『碁茶乱譚』という本まで出されました。茶は茶道、乱は乱舞で能のこと。今でも名古屋や知多半島・海部郡から一宮辺りなどでは、来客があると「よういらやあしたなも。まあ一服どうだやあも。」と必ず抹茶が真っ先に出されるのは、尾張藩の来客もてなしの影響と思われる。また、名古屋に喫茶店が多いのは、この抹茶文化の変形です。さらに、この抹茶文化は、名古屋を饅頭の生産高日本一にしました。

名古屋の食文化については、様々なものがあります。私は名古屋独自の食文化について月刊の小冊子に100回にわたって書いてきましたが、その中でとくに一つを挙げるとすると、「油揚げ（あぶらげ）寿司とまき寿司のセット」を「助六」ということです。『助六』と言えば、歌舞伎十八番の一つで助六こと曾我の五郎が恋人の花魁揚巻と、父の仇討ちに見つけなければならない名刀「友切丸」を捜すために活躍するお話です。そこで、お寿司屋さんで「あぶらげ寿司とまき寿司をくれ」と言うよりも、「助六をくれ」と言うと恋人の「揚巻（油揚）すしと巻寿司」が出てくるという粋な出し方。これは名古屋発の洒落です。また、この「助六寿司」は、名古屋の祭礼では必ず出されるものであり、さらにお通夜にも欠かせないものです。祭礼・葬礼の両方に使われるのはまことに珍しいものです。

この他、名古屋には物作りの職人技の元とも言える、からくり山車や本丸御殿、仏壇・仏具、木桶に絞り染め、名古屋友禅などなど枚挙に暇がありません。

名古屋はこのように様々な文化にめぐまれ、それが今も元気に息づいていますが、言葉に象徴されるように、江戸時代からあまり変わっていない文化です。すなわち変わる必要がないからです。こんな名古屋文化をこれからも大事に継承・活用していきたいものです。